

「自分の重荷を担って」

2022年10月2日

ガラテヤの信徒への手紙6：1～10

佐々木 佐余子

今朝は「ガラテヤの信徒への手紙」最終章に入ります。この手紙を読みますと、初代教会が様々な悩みを抱えていたことが見受けられます。でもパウロは親切丁寧に應對し、最後まで見放しませんでした。大使徒パウロの力量ですね。1節を読むところあります。「兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、「靈、に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい」と教えています。一体何があったのでしょうか、何が起こったのでしょうか。ここには何も書かれていないので不明ですが当事者同士ならこの手紙を読んでわかるのでしょうか。自分でも気が付かない内に過ちを犯してしまい、気が付いてみるとそれが発覚したという言い方をパウロはしており、それを「だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら」と書いています。とかくクリスチャンはそのような罪を裁きやすい傾向にあるのではないかと。でもパウロは一呼吸おいて教えています。「靈、に導かれて生きているあなたがた」とありますが、これはキリストの靈に従っているクリスチャンという意味だと思います。パウロはそのような人を柔和な心で接し、決して裁くことなく正しい道に立ち帰らせなさい、と教えているのです。顧みるにわたしたち、割とさばき合うことってないでしょうか。仲が良くなると遠慮が無くなり、気楽にもの言ってしまうがちです。今は、バザーはあまりしてないですが、景気のいい頃はどこも教会バザーをしまして大変でした。皆素人ですから、わたし含めて、なれないで物の販売をしたり、食堂をしたりするのです。食券を作ったり、食べ物を作ったりします。どうしても間違ったり、意見の違いがあるのです。そして終わって反省会をするのですが、その時教会用語で言えば裁き合うのです。「あれが悪かった、あの人は何もしていないでいた」と言い合います。そういう時風船がぼちんと割れるのですが、でも次の週は元に戻っているのです。神さまは風船を元にふくらましてくださった、と感じます。そこがいいところですね。商品売って人さまからお金をいただくのは本当に大変な事だと思いました。パウロはやさしく、穏やかな心で注意して正しく指導しなさい、と教えました。人に注意するにも言い方があって、きつく言う人とやんわりいう人といいますが、なるべく相手を傷つけないようにしたいものです。パウロは「あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい」と言っています。自分が絶対正しいと思い、自信過剰になるとつい自分を誇ってしまいあやまちにつながることもあります。そのような時、見極めが大事なのです。でないと悪魔に誘惑されてしまうかもしれません。悪魔はここぞとばかり狙っていてその人を偶像化に誘います。それが怖いですね。2節に「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです」と教えます。重荷とは何でしょう。重荷とはその人の苦しみ、悲しみ、心配事、生活する上で精神的ないろいろなものを指すでしょう。けれど相談に乗っても本心まで人はなかなか言えないものです。

ですから重荷を担うとは、その人と一緒に歩いて悩みを聞いてあげる、それだけで悩んでいる人は心が軽くなるのです。軽くならない人もいますが。かえってがっかりして落ち込むこともあります。こんなんでは話さない方が良かったという展開もありますね。新聞で人生案内があります。よく読むのですが、いろいろと教えられます。回答者は、あなたはよくここまで頑張ってやってこられましたね。そういつて相談者を褒める人もいます。そして本題に入って解決策を考える。場合によっては聞くに辛いことも言うでしょう。でもそれは苦い薬になるはずです。相談者は謙虚な気持ちになって聞いて生活態度を改める人もいるし、あるいは見切りをつけてこれからのことを考える人もいるし、様々です。重荷を担うとはその人の立場に立って自分だったらどうするか、一緒に考える人です。すでに回答は相談者が持っている場合もありますね。3節にいきます。「実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思ふ人がいるなら、その人は自分自身を欺いています」と言っています。ひとかどの者とはどのような人でしょう。辞書を引くとこうありました。周りの平凡な者に比べて、取り立てて言う価値があること、という意味で、自分はよく走っている、他の人と比べて大したものだと思いながら走っていれば、その人は自ら高ぶりの気持ちが出てくる。その人は自己満足に陥ってしまい本当に伝道のために働くというか自分自身が崇められたいために働くようになってしまう。それは本当の自分をだます、欺くことなのだを教えているのです。パウロは人間性をよく見えています。パウロ自身はあのように大きな働きをしたにも関わらず、他の使徒たちもそうですが、少しも誇ることはありませんでした。それは絶えず、主イエス・キリストに目を向け、自分が罪人であると認識していたからなのです。教会でいろいろな奉仕が出来るのは本人がしているようであっても、神から霊性を与えられているからであって、その霊性が取り去られれば、したいとも思わなくなるのではないのでしょうか。今現在一生懸命働いている人は、体が自然に動いてしまって、忙しいのも余り苦にならないのです。それはその人に霊性が豊かに降り注いでいるからなのです。でもそれはこれからどのくらい続くかわかりません。ですから働けるうちが花なのです。

聖書を解釈するのは本当に難しいです。2節に「互いに重荷を担いなさい」と言っておきながら5節に「めいめいが、自分の重荷を担うべきです」とありますのでどのように考えたらいいのでしょうか。2節のところは口語訳で読むと「互いに重荷を負い合いなさい」とあります。負い合うのです。マラソンレースで走っていた人が急に何かで倒れてしまった。すると一緒に走っていた人が、その人の仲の良い友達だったとすると「大丈夫か」と声を掛けます。素通りすることはないと思います。それが負い合うです。教会生活で誰かが病気になったら「どうしたの」と声を掛けます。心配します。それが負い合うです。5節は「人はそれぞれが自分自身の重荷を負うべきである」とあるので意味が全然違うのです。人はそれぞれ人によって重荷が違うのです。三重苦の人もいれば身軽な人もいるでしょう。それで自分の重荷を責任をもって負いなさい、とパウロは語ります。例えば祈祷会もそうですね。夜は会社が終わるので皆集まれるから夜にすると、今度は、主婦は来にくくなるのです。食卓の準備もあるし夜外出するにはハードルが高いかもしれません。出来れば午前中がいいと思う

でしょう。そのようにその人によって重荷の度合いが違うのです。それで午前と夜と2回するところもあります。ですから各自が自分の重荷を考えて担いやすいようにして教会生活をなさいと教えました。祈禱会を重荷と考えているわけではなく、わかりやすいように譬で話しています。次に6節「御言葉を教えてもらう人は、教えてくれる人ともちものをすべて分かち合いなさい。」これはどのような意味でしょうか。ガラテヤの諸教会は前にも見てきたように、どうも偽りの教師が幅を利かせていて会員を牛耳っていたようなのです。そのような教師を本当の教師と勘違いをして、もてなしをしていたのではないか。そして、パウロ始めペトロや他の使徒たちが巡回して来た時、軽んじるようになったことは多いにありそうです。ガラテヤの諸教会は主イエス・キリストの福音を避けるようになり、使徒たちに尊敬の念を持たなくなってしまう。しかし、そのようなことはあってはならず、真の教師は教会員と霊的なものと物質的なものとをすべて分かち合いなさいと教えたのです。このまま思い違いをしていたら、主の福音と使徒たちを軽んじることになり、やがては必ず、自分の蒔いた種を結果として刈り取ることになる。8節「自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります」と言います。この真理を学ぶ人は誰でも心貧しくして、主イエス・キリストを追い求める人たちには与えられるのです。ところがお金を積めば永遠の命を与えられると教えたら、教会ではなくなってしまうでしょう。9節、10節は「善行をなささい」と教えます。善行をおこなうことも大変難しいことです。善を行うことは信仰の基本中の基本ですね。昔、ある先生に英語の長文読解を教えてもらった時、質問されて答えられないでいた時「佐々木さん、これは基本中の基本ですよ」と何回も言われて恥ずかしい思いをしたことがありました。でもこの基本中の基本が案外出来ないのです。「信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょ。」これは牧会する上で基本中の基本ですね。でも善を行うことは忍耐を必要とします。神さまから忍耐を与えられて家族になった私たちお互い信仰共同体ですから、励ましあって歩みたいです。以上はパウロ専用の口述者テルティオによって書かれました。11節からはパウロ自身大きな字で自分の手でこの手紙の続きを書いているのです。

11節からはこの手紙のまとめが記されています。結びの言葉です。パウロは偽りの教師を喝破し見抜いています。彼らは同じユダヤ人から迫害されないよう割礼をすることによって律法を守ることによって、教会をユダヤ教の一派として欺きだましているのだとパウロは見抜いているのです。そういう人達は、実は見せかけだけで実際は律法は守っておらずただ誇りたいために、自分は肉の割礼を受けているのだと自慢しているに過ぎないと言います。しかし、パウロは14節できっぱりと言います。「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません」と教えます。そして、「この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。」この言葉がすごいです。世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされた、驚きの言葉です。十字架によって、この世のすべてが罪の故に滅ぶべきものであり、わたしたちはただ主イエス・キリストの身に頼むものにされる、と語るのです。

そのことがキリストによって、新しく作られた者なのだと語っています。

自分の重荷は肩にずっしりときて肩こりするので、湿布を貼りたいところですが、本当はイエスさまの湿布が効くのです。じんわりと効いてきます。肩がこると祈ります。そうすると心が自由にされたようで楽になるのです。これからも自分の重荷がどのようなものなのかを認識しつつ、十字架の主を仰ぎ見つつ、共に信仰生活を守りましょう。